

会 長 あ い さ つ

茨城県海外子女教育・国際理解教育研究会
会長 細野 泰也

今年、アテネ五輪の開催の年で、日本人選手達の大活躍があった。日本国内はもちろん、世界の人々の多くは、人種、民族、宗教等を乗り越えたスポーツの祭典に大きな感銘を受けた年でもあった。しかし、現在の世界情勢は安定よりも不安定へと変化しつつある。我が国の、北朝鮮による「拉致問題」を取り上げても、北朝鮮が拉致の事実を認め2年が過ぎた現在もまだ未解決のままであって、逆に多くの課題が突きつけられた様相である。

さて、これからは世界中の国際化が進む時代といえるが、この国際化はグローバルゼーションからボーダレス社会へと変化するであろうと予想される。この国際化の時代の中で、国際理解を増進させるための基本的な姿勢を3つあげる。

- 1 自己と自文化のアイデンティティーの確立である。
 - ・ ある文化をみるときに、その文化を内側からみる努力をすべきで、外側から違う文化の評価をしてはいけない。
- 2 他国の道徳・習慣・宗教等を学び、互いの文化の相互尊重の姿勢の確立を図る。
 - ・ ある国の習慣や道徳は、それ自体独立して存在するものでなく、他の文化要素と連携して存在しているので、その根幹にかかわる習慣や道徳観を互いに尊重すべきである。
- 3 世界は、経済と政治において、互いに相互関係にあつて、国際協調の姿勢を十分に持つべきである。
 - ・ 国際協調の醸成があると国際紛争は起こりにくい。輸入と輸出も増大しつつある現在、相互依存を基に考え、自国に利益にならないことも行うべきで、国際協調路線によって、互いに助け合う姿勢も必要である。

本年8月27日には、第15回関東ブロック海外子女教育・国際理解教育研究大会、茨城大会がつくば市のノバホール他で開催された。4分科会で活発な研究協議がなされ、300名余りの参加者に感銘を与えたことは、会員各位の喜びとするところである。また、今回の関東ブロック大会では、「SECO」の別冊号を発刊することができ、3月に帰国された先生方には忙しい中での原稿等の提出に感謝申しあげたい。

さて、今回、関東ブロック茨城大会を開催した年にもかかわらず、広報担当の先生方の努力により、在外教育施設に派遣されている先生方の貴重な体験の報告をまとめて2004年の広報誌を発刊することになった。この広報誌が会員相互の、また、会員以外の先生方との交流の場となり、会員以外の先生方が在外教育施設へと挑戦するきっかけになり、さらに、茨城教育の大きな財産となつて、国際理解教育に多いに役立つことを願っている。会員の先生方が、自分の学校でこの広報誌をそれぞれの研修に役立てていただければ幸いである。

在外教育施設に派遣されている先生方からのお便り

平成13年度派遣

現地理解教育を通して

ローマ日本人学校教諭 村上雅美

本校の在るローマ市は、街の至るところに遺跡や遺構がたたずみ、赤褐色の歴史的建造物に囲まれた古の街です。年間を通して、日本はもとより、世界各国からの観光客でにぎわいをみせております。

本校は、旧校舎の老朽化に伴い、昨年9月に現在地に正式移転いたしました。郊外の緑に囲まれた敷地の中で、のびのびと幼稚園生・小学生・中学生がともに学んでおります。

今年度の本校の教育重点目標の中に、「現地の良さを生かした教育の推進」があげられております。ここでは、本校の現地理解教育実践の様子を報告したいと思います。



○ 小学部3・4学年では、「ローマをもっと知ろう！キッズツアーコンダクターになろう！」の単元を通して、次のような活動をしています。

- ・ ローマ市内の名所（トレビの泉・パンテオン・コロッセオなど）について、観光案内本やインターネットで調べる
- ・ 現地ライセンスガイドに入門
- ・ 現地で日本人観光客に調べたことをもとに観光案内

調べたことをまとめ、暗記して、各名所に出かけて日本人観光客に案内をしました。相手に伝えるためには、「相手の方を見て、手振りを使って、自信をもって」やらなければならないことを児童は、学ぶことができました。時には、現地ガイドさんにマイクを借りて、大勢の日本観光客の方に案内する機会をいただきました。

- ・ インターネットやパスタ博物館での調査活動
- ・ パスタづくりに向けて、食材となる植物の栽培と育成
- ・ プロのシェフ（外部講師）によるパスタや素材、料理方法の学習

近くのレストランで、パスタ作りを見学したり、近隣住民に「好きなパスタアンケート」をしたりして、課題をつかんだ上で学習を進めていきました。文化発表会では「究極のパスタづくり」の方法を伝えるとともに、児童が自ら育てたトマトやバジリコを使ったパスタの試食会を催しました。

いずれの学習も、現地の方々の協力、理解のもとに成立したものです。今後も、児童生徒自らがテーマを見つけ、楽しみながら調べ、体験していくことで、充実感や満足感の得られるような学習を目指していきたいと思っております。

平成14年度派遣

「我愛台湾・あいたくて」－八田與一と清水照子－

台北日本人学校教諭 小倉祐一

「我愛台北」とは「アイラブニューヨーク」の台湾バージョンであるが、台北駅の構内

などで、よく見受けられる言葉である。台北に赴任してはや3年目になるが、確かに住むほどにこの地が好きになってくる。私は1年目は小学部の2年生の担任をし、昨年は中学部全クラスの国語を担当した。そして、今年も、また小学部に戻り小学部主任（教務）として全22クラスの教育活動の推進役を仰せつかっている。

それぞれの年ごとに思い出は尽きないが、昨年度の中学部1年の国語科の授業で「我愛台湾・あいたくて」という総合的な単元を設定したが生徒達の熱心な取り組みが印象に残っている。単元名の「あいたくて」というのは、台湾で生まれ育った工藤直子氏の詩の題名からとっているが、生徒達はグループ別に自分達の考えた台湾に関する課題を持って学習を進めていった。その中に、「台湾で活躍した日本人を日本の中学生に紹介しよう」という課題のグループがあった。子供たちは、紹介したい人物として「八田與一」と「清水照子」を選んだ。二人の人物を簡単に説明すれば次のようになる。

八田與一は、昭和5年に、東洋一のダムを台湾に建設し、用水路を整備し、不毛の地であった嘉南平原を緑豊かな水田地帯に変えた人物である。台湾にあった日本人の銅像は、戦後に壊されていったが、その中でたった一つだけ、八田與一の銅像だけは残された。台湾の人々は、現在も與一の銅像を恩人として大切に守り、命日には盛大な追悼式を行っている。

清水照子は、台湾のマザーテレサと呼ばれている。照子は道端に倒れている浮浪者や貧しい人々を助け、「愛愛寮」という施設で彼らを介護し、平成13年に91歳で亡くなるまで、終生ボランティア活動を続けたのである。台湾の経済が発展し、浮浪者の姿も少なくなった現在も、台北市の「愛愛院」という老人ホームとして施設は継続され、仁愛と愛護の精神は受け継がれている。

子供たちと八田與一と清水照子を調べながら、台湾を愛し、また、台湾の人々から愛されている日本人がいたことが、この上なくうれしかった。そして、目の前の生徒達が、将来の台湾と日本の架け橋となり更に友好の輪を広げていってくれることを願わずにはいられなかった。「我愛台湾・あいたくて」という単元名は、今の私の心情にも符合し大切な言葉となっているのである。



【八田與一の像と墓】



【小学部6年生の修学旅行で児童代表の献花の様子】

グアテマラにおけるインクルーシブ教育事情

グアテマラ日本人学校教諭 立石 祐之

社会的にさまざまなハンデを背負って生きることを余儀なくされている障害者が、生活しにくいという社会が、そもそも間違いであり、どのようなハンデを持っている人でもハンデも持っていない人と同様に権利を享受できる社会を作っていこうとする考え方が、ノーマリゼーションという考え方である。

学校教育の中でも、障害者が障害のないノーマルな生活に、できる限り近づくことができるように、条件を整えていくノーマリゼーションの理念が推し進められている。つまり、障害児一人ひとりのニーズを発見し、それを尊重するところから出発した特殊教育は、その範疇になかった障害、LD、ADHD、高機能自閉症を含めた障害のある児童生徒の一

一人の教育的ニーズにも応じた特別支援教育へシフトしようとしている。平成15年3月に出された「今後の特別支援教育の在り方について（最終報告）」では、「特別支援教育は、児童生徒一人一人の教育的ニーズを把握して適切な教育的支援を行うものです。」とある。障害の有無に関係なく、すべての子どもが普通学級で学び、ニーズに応じた教育支援を行っていくこの「インクルーシブ教育」は、まさにノーマリゼーションという考え方の上に立つものであるといえよう。

(1) グアテマラ国の障害児教育の方針とシステム

「Política y Normativa de Acceso a la educación para la Población con Necesidades Educativas Especiales」(教育省発行の冊子)の中に、障害児教育は、「Normalización (ノーマリゼーション)」「Integración (統合)」「Equiparación de Oportunidades (機会均等)」「Educabilidad (教育できる)」「Flexibilidad (柔軟)」「Inclusión (インクルーシブ)」を基本原理として進めていく旨が明記されている。

「ノーマリゼーションという考え方をもとに、障害をもった児童生徒も普通学級の中で共生させながらも個別のカリキュラムを持って指導していくことが子どもたちの利益になり一番大切なことである。そして、①身体的障害や移動の能力・聴覚・視覚の障害、軽度知的障害を持った児童数を把握し、同じ普通学級の中で障害児教育を必要としている人口の特定をすること、②教師の指導力の向上に関することで、子どもたちの誰もが尊重され、差別が生じないように推し進めていく教師の研修や障害児の教育的ニーズに基づいて決められた援助の技術向上、③障害児の周辺の児童に対する支援、等を推し進めたい」と、教育省の障害児教育の担当スタッフが「グアテマラにおける障害児教育の方針」についてお話をしてくれた。



さて、グアテマラで国の障害児教育を実際に進めているのは、「教育省障害児教育部」と「大統領府社会福祉局」の2つの組織である。

まず、「教育省障害児教育部」であるが、構成は担当者7名、秘書1名からなり、グアテマラ21県に19名のコーディネーターを派遣している。(しかし、ある学校の障害児クラス担任の先生が県のコーディネーターを兼ねているケースもあり、全県的なコーディネイトまではなかなかできないでいる。また、障害児教育を推進していくために、各県の実務委員会、コーディネーター、携わっている教師(全員ではない)などへの研修、冊子の作成・配布などを実施をしている。また、他の障害児施設(私立)や親の会と連携等、行っている。

「大統領府福祉局」は首都での活動のみ行っている。知的障害のみ、現在200名の知的障害児の教育に携わっている。

視覚障害、聴覚障害教育の分野はある程度のレベルがあるが、知的障害の分野が遅れている。(自閉症やADHDは行動障害として位置づけられている)

身体障害児、視覚障害児、聴覚障害児、軽度・中度の知的障害児は特別な施設を設けるのではなく普通教育の中で統合教育を、重度障害児は養護学校で教育していく方針が進められている。

(2) 障害児教育の現状

グアテマラ国内全体で、障害児教育に携わる教諭は165名。グアテマラ教育省において、就学対象の子供の10パーセントは特別な支援が必要な子供がいると捉えている

(2004年就学対象人数は318万4803人)。しかし、実際に、身体障害、視覚障害、聴覚障害、知的障害等、該当とされ、指導の行き届いている児童は、グアテマラ全体で、現在4,187名だけである。(平成16年8月10日現在、教育省訪問での聞き取り調査から)つまり、大部分の障害児は、在宅の状態である。

就学している障害児の多くは、親がお金を払って私立の養護学校に入れている。国立の学校での障害児を受け入れる取り組みが機能していないので、私立にいかざるをえないのが現状である。ここで、私立といっても、自分が障害のある子どもを持っていたという先

生やボランティアの人が自分でおこした学校で、お金もスタッフも教育施設や内容も充分でなく、資金集めもままならぬということである。

また、障害のある子どもを持つ家庭の中には、障害児を「神様が降りてきた」とか「自分の罪に対する罰だ」とか「日蝕、月蝕のせいになった」とか古くからの迷信を信じている親もまだ多くいる。また、妊娠中に風疹の予防をするなどの知識もないので、広報誌で、一般家庭に啓蒙している。障害児は家の外にはだせないと思っていて家に閉じ込めたまま、予防接種などもうけさせなかったりするケースもあるので、家庭への教育も重要な課題となっている。

障害児教育については、福祉面と関連し、本来、国で配慮していかなければならないことであるが、カナダの援助、アスカテ（NGO団体）で、グアテマラの教育調査が行われている。

グアテマラでは、その国情から優先される他の事業があるので、障害児教育に関して予算も少なく、後回しになっている。さらに、4年ごとに大統領の替わるたび、政策も替わってしまうので、教育省のプロジェクトもなかなか続けていけない実態がある。

そんな、グアテマラの国情等だからこそ、障害児は、普通学級の中に依存する必要があるといえるのではないだろうか。まずは、結果として、障害を持った子ども達の受け皿が是が非でも必要であるのではないだろうか。

グアテマラでの「インクルーシブ教育」は、知的障害者の進級問題や個のニーズに応えるカリキュラム作りや教材の開発等、抱えている課題も多いが、そのイデオロギーは、ノーマライゼーションの理念のもと、十分とは言えない整備ではあるが、グアテマラとしてできる限りのことを推し進めている結果とも言えよう。

[参考] 教育省の持つ障害児教育の主な連携機関

- 1 人権センター
- 2 グアテマラ神経学研究協会
- 3 国立サン・カルロス大学附属心理学センター
- 4 障害者教育支援協会
- 5 グアテマラ盲聾委員会
- 6 身体障害者福祉財団
- 7 ベサニア協会
- 8 国立リハビリテーション・整形外科病院
- 9 特別な支援の必要な子供のための専門家と親の会（自閉症）
- 10 障害者の友と親の会の連合

激動の三年間を振り返って・雑感

北京日本人学校 遠藤 弘太郎

私が北京に赴任してから早3年目が終わろうとしています。北京に赴任してからというもの本校で起きたニュースが日本のニュース、世界のニュースとして流れたことはみなさんご承知のことと思います。本校の学校運営理事会の理事の方々からも開校以来、最も厳しかった3年間と評されています。その3年間を雑感ですが、振り返らせて頂きます。

1 本校で起こった大きなできごと

(1) 運動会での集団食中毒

1年目の運動会で教職員とその家族に出された弁当が元で集団食中毒となった。殆どの教員とその家族が食していたが、幸い私自身は当日忙しかったこともあり食さなかったことで被害を逃れた。しかし、妻と長男は猛烈な下痢



と嘔吐で別々の病院に入院した。

その時痛感させられたのは、緊急時に費用の心配をせず、日本語による万全の治療を受けられる駐在員保険の重要性と教員の連絡網の重要性、そして教員と教員の家族間のチームワークの重要性であった。私が妻と長男が食中毒と知ったのは、運動会翌日の朝で当時の校長先生からの連絡であった。この日から約一週間以上殆どの教員と家族は体調不良のまま勤務を余儀なくされた。しかし、在外勤務ということもあり、誰1人年休を取る者がいないことは責任感とプロ意識の高さを実感することとなった。

(2) 脱北者侵入事件

1年目を終わろうとしていた2003年2月。学校正門付近で作業をしていた私は、正門の警備員を突破して3名の者が、構内に侵入するのを目撃した。その時、ちょうど下校時刻でもあり、多くの小学生がその付近を歩いていた。侵入と同時に子どもたちから「キャー」という声が挙がり、混乱する様子が見られた。大阪の池田市で起きた事件のこともあり、とっさに私は3人の侵入者を正門の外に出し、門を閉じ、鍵をかけた。

その後、普段からの避難訓練をやっていたこともあり、スムーズに下校体制をとることができたが、侵入直後から職員室にマスコミ各社から電話による連絡がひっきりなしに入り、その対応に追われた。その様子が、某民放テレビ局に撮影されていたことで、翌日からは、本校のホームページには、私のとった行動に対して非常に心ない書き込みが殺到した。ただ、大使館をはじめとして校長先生にはマスコミ対応をして頂き、また何より父母会や学級の保護者から大変温かいご指示の声をいただき、励まして頂いたことは心強い限りであった。また、私が保護した児童の保護者からもお礼の言葉をいただいたことは何よりもうれしく感じた。

(3) 新型肺炎流行時

2年目の新学期まもなくのこと。中国の広東省、香港で新型肺炎の感染者が急増しているとのニュースが流れた。このニュースに対し、北京の邦人社会の中でいろいろな噂が流れ出した。それは、公式のニュースではまだ流れていないが、北京市内の主要な病院では、新型肺炎患者が多くなり、病院内の出入りが不自由になってきていること、北京市内でも新型肺炎の患者が急増しているとのことであった。その噂に拍車をかけたのは、日本のカメラメーカーの駐在員とその家族がいち早く緊急帰国を決めたことであった。噂に流されてはいけないのは常識ではあるが、この中国は未だ情報統制が完全である状況を考慮して、北京にいる駐在員はその噂に対して独自の情報網を持ち、非常に素早い対処をするのも特徴であることが分かった。一番早い緊急帰国から2週間ほどして、中国政府も北京で発生した患者数を公表することになり、邦人の北京脱出が本格化した。当時の本校の在籍者数が約450名前後であったが、そのうち最終的に北京に残ったのが、60名弱となり、4月末から約1か月の休校措置となった。北京駐在員の殆どが一時帰国を余儀なくされる中、私たち教員は、毎日日本に帰国した生徒と連絡を取る毎日が続いた。この間、人口1300万人の北京市内はしばらくゴーストタウン化していた。街を歩く人は殆どおらず、商店は閉まり、バスに乗る人は皆マスクをしている異常な光景がヶ月以上続いた。本校でも学校再開に向けて、消毒体制をどうするか、体温チェックはどうするか、感染者が出たときの対応は？といった具体策を立てるのに連日対策会議が行われた。その様子はテレビ局や新聞社の取材で報道された。新型肺炎の影響は、結局2学期の中頃まで続いた。

(4) 2回目の脱北者侵入事件

今年9月1日の2学期始業式の日。私は自分の学級で学級指導を行っていたところに、緊急放送が入った。「全校児童、生徒のみなさんに連絡をします。教室の戸を閉めて、鍵をかけてください。」この声に、私は侵入があったことをすぐに覚った。隣の担任がちょうどそれを目撃したらしく、今回の侵入は、前回と違い、30名近くの侵入であったこと、窓ガラスを割り、ドアを壊して暴徒化して、教員がケガをしたことを私に伝えてくれた。その後、担任外の教員から教室で待機している各担任にトランシーバーが配られた。その後、放送で「先生方はトランシーバーの電源を入れ、情報をイヤホンで聴いてください。」と連絡が入った。(本校では、各担任が緊急時に備え、トランシーバーを1人1台持っている。)トランシーバーにイヤホンを差し込み、児童生徒には不安を与えぬまま、状況を教員が知ることができたのは侵入者が構内のどこにいて、どのような様子なのかを逐一知ることとなり、その後の冷静な対応につながった。この事件以来、私の提案で全教員が授業中もトランシーバーと携帯電話を携帯することになった。

(5) 学校隣で爆発物騒ぎ

同じ9月のこと。今度は、学校近辺が警察によって交通規制が敷かれ、封鎖されていることが判明。下校時刻も近かったこともあり、担任から、下校時刻の変更と今後の対応について学級の連絡網を使って緊急連絡を回した。当初、どうして封鎖されているのか判明しなかったが、本校の通訳（中国政府から派遣されている政府外交服務局職員）が中国政府当局、警察当局に連絡した結果、学校隣のホテル敷地に爆発物が仕掛けられているとホテルに電話がかかったのが分かった。結局、約1時間後何事もなかったかのように封鎖が解けたが、やはり、この時にもこの中国で正確な情報をつかむには中国人スタッフなど、独自の情報網を持っていることの重要性が感じられた。

2 派遣教員としての3年間

(1) 小学部1年生担任から中学部2年生担任へ

本校に赴任するまで小学校の高学年を主に担任してきたが、本校に赴任した1年目は小学部1年生担任であった。当初、担任したことのない1年生ということで、どうなることかと思ったが、日本から持参した教育書を片手に何とか無事に一年間をつつがなく過ごすことができた。ただ、日本以上に、非常に熱心な保護者の方が多かったことにも助けられた。また、学級委員さんを初めとして非常に熱心な保護者の皆様に支えられ、学校以外でも学級の子どもと保護者、そして担任を交えての懇親会が何度となく催して頂いた。特に、脱北者で苦境に立たされた際には、励ます会を開いて頂くなど非常に温かな心遣いをして頂いた。中学部の担任となった今でもこの学級の懇親会が続いていることは、一生の思い出になるだろう。

2年目になる際、校長先生から中学部2年主任をやるようにとの言葉をいただいた。前年度、学級が混乱気味の中学1年生を立て直してほしいとのことであったが、この北京では邦人社会が非常に狭く、保護者も世界の日本人学校の中では指折りの熱心さと言われている中で小学校での教員経験しかない私には本校での教員生命を絶たれるかもしれないという大変なプレッシャーにおそわれた。また、本校の生徒はこれまで日本でもトップレベルの進学校に進学していることも知っていたこともプレッシャーの一因となった。

ただ、体当たりで今持てる力をすべてぶつけるのみと心を決め、1年間臨んだ結果、十分な学力保障とまでは至らなかったものの、3学期の修了式の日には、生徒から温かい言葉と別れを惜しむ声を聞き、生徒の涙が見られたことができたことは3年間の最大の成果である。

(2) 派遣教員と家族の生活

2年目には、派遣教員の受け入れ、帰国教員のお世話、教員家族の生活の担当者となった。日本人学校と日本の学校が根本的に違うのは教員とその家族の密着度にある。その生活担当として派遣教員とその家族が安心して生活できるよう、住宅の選択、不動産業者との交渉、航空会社、運輸会社との交渉、赴任したばかりの教員と家族の生活のお世話、教員子弟が通う幼稚園との入園交渉、などなどその仕事はまさしく雑務ではあったが、責任は大きかったが非常に勉強させて頂いた一年間となった。

(3) 中国の学校支援体制の確立

本校では、毎週水曜日をリサイクルデーと名付けて、空き缶、ペットボトル、新聞紙、牛乳パックなどのリサイクル活動を設けている。リサイクル委員会の児童、生徒による活動であるが、この収益金によって、河北省の経済的に厳しい地区の学校にサッカーボールやパソコンなどの学校備品を毎年寄贈することとなった。この委員会は、私が1年目に立ち上げ、現在は完全に軌道に乗り、北京日本人会にもご理解頂き、会報などで紹介され、多くの保護者にご協力頂けるようになった。私が帰国してからもずっと、日中友好の草の根的な役割を果たしているこの活動を続けてほしいと願っている。

※ 写真は、この夏に私たち教員が訪問した北京日本人会が設立した河北省希望小学校の子どもたちの様子です。この学校に、今年もリサイクル委員会での収益金で購入したサッカーボールを寄贈してきました。

シンガポールのローカル校における伝統行事について ～ムーンケーキフェスティバル～

シンガポール日本人学校チャンギ校教諭 沼田 義博

1, はじめに～ムーンケーキフェスティバルとは～

ムーンケーキフェスティバルとはすなわち中秋節である。日本で言う十五夜がこれにあ

たり、太陰暦の8月15日におこなわれる。中国系住民が8割以上を占めるここシンガポールならではの伝統行事である。この日には家族みんなで月餅（ムーンケーキ）を食べ、ランタンに灯を灯しながら団欒を楽しむというものらしい。中国ではもともと丸い形は家族や友人の再会・結束を意味していると言われ、縁起がいいとされている。またこの日は農作物の収穫を祝うときでもあり、豊作の感謝の気持ちも込められていると言われる。

ところで、この時に欠かせないアイテムとしてランタンがあるが、こちらで言うランタンとは、日本で言うところの提灯のようなものである。針金や竹ひごなどにセロファンや和紙を貼ってカラフルに色付けしたものである。チャイナタウンをはじめ街のあちこちの店先では、この時期大量のランタンと月餅が並ぶ。夕暮れ時からそれらのランタンに灯が入り、通りを照らす様はまさに圧巻である。

2, なぜムーンケーキなのかこれについては諸説様々なようである。ただし、一般的には下記に記す伝説が広く人々の間に知られているようである。実際にイーミン校の校長先生に伺ったときにも、同じ話をされていた。

遠い昔、十の太陽が一度に空に現れ、どこもかしこも日照りで苦しんでいた。このとき現れた一人の男が天に向かって弓を引き一息に9つの太陽を射落としてしまった。人々を災難から救った彼は皇帝として取り立てられる。しかし、皇帝になってからは酒色におぼれ任意に人を殺す暴君になってしまった。皇帝自身も自らの暴挙のために、身の危険を感じるようになる。そこで彼は崑崙山の魔女のところに行って不老不死の薬をもらってきた。それを知った善良な彼の妻は皇帝として彼がいつまでも死なないようにすることを恐れ、その薬を盗み自ら飲んでしまう。このとき薬を隠して持ち去り、食べたのが月餅であると言われている。

不老不死となった今、もういつまでもこの世にはいられないと思った妻は、中秋の満月の夜に月の世界に飛んでいってしまう。このことを知った市民は、彼女の行いに感謝するとともに、簡単にあのような男を皇帝にしてしまった

自分たちを戒めた。それを記念して「ムーンケーキフェスティバル」と呼ばれるようになったと言われている。

3, イーミン校の取り組みの内容

日時 PM7:00～PM9:00

参加者 全校児童 全職員 保護者及びその家族 場所 イーミン小学校体育館

イーミン小学校には中国系（華人と呼ぶ）が多いとはいえ、マレー系、インド系の子どもたちも多く見られる。それぞれの民族衣装を身に纏い子どもたちは今か今かと開演の時を待ち構えていた。保護者やその家族も含め、体育館の中は大変な賑わいようであった。開会セレモニーは英語と中国語（マンダリン）で行われる。司会進行やスピーチなどの一切は、学校の職員が行っていた。プログラムは全部で12あり、学校長のスピーチを除いて、全てが歌や踊りである。こちらは子どもたちの発表であるが、マレーやインドの民族楽器や歌などの発表もあれば、今シンガポールで流行しているダンスや歌のようなものもある。一切宗教色は感じられない。一つ一つのプログラムの完成度は高く、観客も一緒になって歌ったり踊ったりして、学校の行事とすることを忘れてしまうほどであった。日本でよく行われる七夕集会やひな祭り集会などとは全くと言っていいほど雰囲気は違う。お祭りの要素が強い。ひとしきり体育館でのアトラクションが終わると今度はランタンパレードである。思い思いに作った手作りのランタンを持って、子どもたちは学校の周りの道を約1キロにわたって練り歩く。先導や灯の管理なども保護者が随時あいだに入ってくれて安全に行われていた。懐かしい日本のお盆のお墓参りを連想させる風景だった。そのパレードが終わると最後はムーンケーキを食べる時間となる。

色とりどりで味も様々なムーンケーキが大ホールにたくさん用意されていて、みんなで

自由に食べるのである。立食形式なので場の設定も特には無いが、たいした混乱も無く、和やかに会は進行して言った。時刻はまもなく9時になろうとしていたが、子どもたちはみな元気で、友達と話したりムーンケーキを食べたりしていた。ある程度の時間が過ぎた頃、簡単な校長先生からのスピーチが入り、この行事全体の終了となる。子どもたちは三々五々保護者とともに家路についていった。大掛かりな行事であるにもかかわらず、終わりは爽にあっけなかった。

この会に関する準備は、1ヶ月ほど前から進められる。主に教師が主体となって計画を進めてゆく。子どもたちの練習はほぼ毎日、放課後に学校で行われたり地域のコミュニティーセンター等で行われたりしている。指導にあたるのも、教師であったり民間の指導者であったり、発表する内容によって様々である。学校と地域との連携・協力が行き届いていると感じた。また、民族間によっても多少考え方が異なり、学校教育に対する協力の仕方が違うのかもしれない。いずれにしても、保護者の学校教育に対する関心は、日本同様あるいはそれ以上に強いものがあると言える。会場の作成も1週間前から始まる。父親のコミュニティーがあり、そこが分担して担当していると言っていた。

4. 行事としての意義～日本との比較～

9月のこの時期はちょうど学期の変わり目である。したがってこの行事は学期末の打ち上げパーティー的なものである、と学校長は話されていた。各ローカル校はそれぞれに学期末にいろいろなイベントを用意しているらしく、イーミン校では「ムーンケーキフェスティバル」がそれにあたるのである。どこの学校も「ムーンケーキ」を扱うわけではなく、全校児童で取り組んでいるのはイーミン校だけと言っていた。伝統的行事とは言っても、各民族によって異なるシンガポールにおいては、統一的に扱えるものはほとんどないと言っている。どうしてもそこに宗教的な生活習慣の違いが出てくるからである。行事を扱う際にも、その部分は考慮が必要なのだろう。できるだけイベント的要素を強め、偏った民族色を消さなくてはならないのである。いい例が給食である。マレー系が約2割りを占めるこの国では給食指導は成立しない。なぜならば、ラマダン（絶食時期）には子どももお昼ご飯はおろか、水も飲まないからである。

このように見てくると、シンガポールにおける学校行事の取り扱いは、日本のように伝統的な事実や情緒に親しむものではなく、学校全体のお祝いのようなイベントとして扱われるものだ、と言えるようである。

そこらへんのベンガル人

ダッカ日本人学校教諭 鈴木 博

ダッカへ赴任し、まもなく3年がたつ。今年の夏は数十年ぶりの異常気象で、記録的な大雨に見舞われた。市街地も洪水になり、大通りには多くの避難民たちがテントを張って生活していた。また、家の前にはボートが出動し、リキシャに代わる移動手段となっていたのは驚きであった。

さて、我が校では総合的な学習として3つの大単元に取り組んでいる。現地の学校やフレンチスクールとの交流会である『世界の友達と仲良くなろう』。バングラデシュの文化や伝統に触れる『バングラを知ろう』。学級単位でバングラデシュや働く人について、自由にテーマを設定して学ぶ『マイ・プロジェクト』。

この『マイ・プロジェクト』は、毎年10月に行われる学習発表会で、その学習の成果を発表している。今回、我が学級（といっても4年生の真史君1人だけである）では、誰もが気になっているが誰も聞いたことがないという謎ー「そこらへんにいる人はなぜそこらへんにいるのか？」ーに取り組んだ。学校周辺をはじめいたるところで昼夜を問わず、



人々がフラフラしているのが不思議だったからだ。「あなたは何をしているんですか？」片言のベンガル語を駆使し、身振り手振りで80人と話をした。調査開始時には緊張していた真史君も、次第にベンガル人たちの人柄の良さがわかり、積極的に話しかけられるようになった。周りにはいつの間にか多くの人が集まってきて、あっという間に人だかりができる。たとえ言葉が伝わらなくても、誰かしらが通訳しようとするお節介ぶりが見られて面白かった。調査の結果、ほとんどの人が仕事を持っていること、大工やレンガ割りなどの肉体労働者が多いことがわかった。(ただし、誰もが休憩中と言いフラフラしていた。本当か?)「優しく親切で、働き者である。」これは真史君の調査後の感想である。今まで抱いていた、バングラデシュという国や人に対してのマイナスイメージの改善につながったのは良かった。しかし貧しいことには変わりはない。服はボロボロ、一日中働いても食べるのがやっと、洪水で家をなくしても自力で生き抜くしかない。それでもアラールを信じて祈りを捧げる彼ら。「バングラデシュは好きか？」と尋ねると、なんと78人が「好きだ」と答えた。理由は「自分が生まれ育った国だから当たり前だろ」ということだった。以前の原稿で「愛国心があまりない」と書いてしまったのだが、どうやら訂正しなければならないようだ。

平成15年度派遣

ニュー・ヨーク日本人学校ニュージャージー校から

ニュー・ヨーク日本人学校ニュージャージー校教諭 安藤 玲恵

私が勤務しているニュージャージーは自然が豊かで故郷茨城を思い出させます。毎朝リスやグースと顔を合わせ(時には強烈なおいを出すスカンクも!)さわやかな1日が始まります。ニュージャージー日本人学校(ニュー・ヨーク日本人学校ニュージャージー校)は初等部と中等部があり、児童・生徒は約70名、派遣教員は13名という小規模校です。みんなとても仲がよく、家庭的な雰囲気です。校舎は教会の施設を借りており、小さな学校ではありますが、工夫しながら快適な教育環境を提供しようと努力しています。

ニュージャージー日本人学校はニュー・ヨーク日本人学校グリニッチ校の分校としてスタートし、6年前分離独立をしました。しかし、派遣直前の研修で「2年後、ニュージャージー校はグリニッチ校と統合になります」と文科省の方から聞いた時は正直驚きました。私がすべきことは何だろうと考えながらの赴任。正直言ってかなり不安でした。

こちらに来てすぐに、児童・生徒だけでなく保護者の方も教員もこの学校が大好きなこと、できるならばこのニュージャージー校を存続させたいと心の底から思っていることを実感。統廃合の前に“子どもたちのためにさらに充実した教育を”と、誰もが毎日必死でした。

2004年3月、これからニュージャージー日本人学校最後の年度を迎えようとしているときに、突然の「統廃合延期」の連絡が入りました。ここではその理由は割愛しますが、児童・生徒、保護者、そして教員みんながその決定に涙を流して喜びました。これからも多くの人から愛されるこの学校を存続させていこうと、学校全体が団結し、さらに盛り上がっています。

アメリカにいらっしゃることがありましたら、「世界一の日本人学校」を目指すここニュージャージー日本人学校まで是非足をお運びください。子どもたちの笑顔が作り出すあたたかい雰囲気をご覧いただけたらと思います。

ジャカルタの風景

ジャカルタ日本人学校 教諭 山田 聡

私がジャカルタに赴任した頃は、通勤時間四五分の道のりだった。日本から来て間もない当時は、その車窓から見る風景の何もかもが新鮮で、ジャカルタならではの色々な発見

があった。交通整理のお兄さんにコインを渡し、渋滞で止まっていれば少年が新聞を売りに来る。また、ソピルさん（運転手）は、隙あれば狭いスペースに競って割り込んでいく。しかし、毎朝こんな戦場のようなスタートが続く中で、次第に、早く目の前にある道路が出来ないものかと、疎ましく眺めるようになった。

最近JJS（ジャカルタ日本人学校）までの高速道路がほとんど出来上がった。20分程で到着するようになり、とても快適になった。流れるような景色が続くことがうれしかった。

しかし、最近なぜか渋滞していた頃を懐かしく感じるのである。他の車と道を競り合う緊張感や、その時々に変わる進路。目の前で繰り広げられる、ジャカルタの生活風景……。心なしかソピルさんの運転も、張りが無くなった気すらしてしまう。人間の思いとは、何と勝手な物か……。

私は、このジャカルタの地で、日本では見られない光景を沢山見てきた。時には、いらいらさせられることもあるが、何か心休まる瞬間を感じることも多い。

「便利さ」の裏に隠れてしまった「不便だけど、心休まる瞬間」。たまには遠回りをしてみるのも、いいのかもしれない。

サンパウロにて

サンパウロ日本人学校教諭 根本 英生

私が、ここブラジルのサンパウロ市に日本人学校の教員として派遣されて、約1年半が過ぎました。

初めての海外生活。海外旅行も新婚旅行で一度行ったきりの私が、どんな生活を送るのだろう、そして、海外で生活している子どもたちとは一体どんなことを感じ、考えて生活しているのだろうと、楽しみでもあり、不安でもありました。そんな私も今は2年目の派遣教員として仕事をさせてもらっています。不安も解消し、子どもたちと楽しく毎日を過ごしています。

今年度は小学部5年生児童の担任をさせてもらっています。現在男子8人、女子8人、計16人の子どもたちです。この7か月で、2人の児童が日本へ帰国し、2人の児童が編入学してきました。1年生のころからサンパウロ日本人学校で過ごしているという児童は2人しかいません。それぞれが色々な経歴を持っており、今ここでの出会いを大切に生活しています。

さて、ここサンパウロ日本人学校では「総合的な学習の時間」として担任が構想を立てられる時間は年間35時間、つまり週1時間です。（その他に「ポルトガル語」と「英会話」の授業が取り入れられています。ブラジル生活が長い子どもはポルトガル語がペラペラですし、英語圏から来た子どもは英語がペラペラです。私は舌を巻くばかりです。）子どもたちがワクワクするような時間にしたい、ブラジルでの生活をいっそう楽しいものにしてほしいという願いを込めて、昨年度まで「ブラジル理解」と呼んでいたものを「ビバ！ブラジル」と名称も改められました。この35時間でどんな力をつけていくのか、そのためにどんな題材を用意するのか、どんな方策をたてるのか、系統的な指導をしていくには、ということで教員たちは知恵を出し合っています。体験的な活動を多く取り入れて授業をつくっていきたいと取り組んでいますが、安全面への配慮から校外へ出た活動は容易にできるものではありませんし、地域の人との関わりというのなかなか難しいものです。校内の敷地をいかに利用するか、人材をどうやって発掘し関わってもらうのか、恥ずかしい話ですが、実際には今も暗中模索しています。知識や教養をはじめとしてコミュニケーションの能力など、私自身の総合的な力というものが試されているようにも感じます。

任期を、子どもたちのために、そして自分自身のために充実した時間にしたいと思えます。今後とも、ご指導よろしくお願ひいたします。

「現地校との交流を通して」

スラバヤ日本人学校教諭 渡辺幸司

本校では、国際理解教育の一環として現地校との交流を多く取り入れています。年間を通して定期的に交流会があり、児童生徒にとって、とても楽しみな行事になっています。

1学期は、現地の小中学校の児童生徒を本校に迎える「現地校招待」を行います。全体での歓迎レクリエーションから始まり、各学級・学年ごとに分かれての交流を行います。日本の授業を実際に行ったり、日本の文化（コマ、折り紙、百人一首など）を一緒に体験したりしながら、お互いの交流を深めます。子ども達は、週一時間行われているインドネシア語会話の勉強を生かし、身振り手振りを交えてコミュニケーションを図っています。

2学期は、「東部ジャワ日本クラブ運動会」に現地校を招待し、紅白に分かれて一緒に競技を行います。この運動会は、現地におられる一般の日本人の方々も一緒に参加するので、スラバヤ中の日本人の運動会になります。そして、現地校交流の一番の行事「国際文化交流会」を行います。現地校を招待し、それぞれの国の文化を劇や歌、踊りなどを発表し合います。また、学校ごとの作品を出し合う展示コーナーも設置し、お互いの国の文化を理解し合う交流会です。

3学期は、日本人学校の児童生徒が現地校へ訪問する「現地校訪問」を行います。小中学校別々の学校へ行き、実際に現地校の授業を受けたり、一緒に歌を歌ったり、スポーツを楽しんだりします。

最後に年間を通しての交流は、総合的な学習の時間（本校ではスラバヤタイム）とスポーツ交流を行います。スラバヤタイムでは、各グループごとにインドネシア文化について調べ、まとめて発表会を行います。私は、今年インドネシアの楽器（ガムラン）作りグループを担当し、現地校の生徒と一緒にガムランを制作しています。スポーツでは、放課後運動（週1回）の活動の成果を発揮するため、現地校との交流試合を年1～2回行います。サッカーやバスケットボール、バドミントンなど様々なスポーツを通して交流を深めます。インドネシアでは、現在サッカーやバスケットボールが人気のあるスポーツです。

このように、子ども達は様々な活動を通してインドネシアの人たちとの交流を深めています。現地校との交流は、海外ならではの国際理解教育であると実感しています。

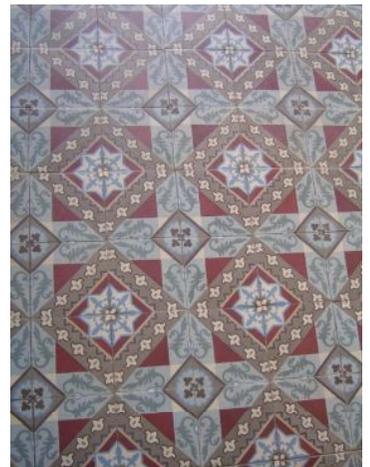


ブエノスアイレス敷き詰め模様

ブエノスアイレス日本人学校教諭 今瀬 智洋

毎朝、徒歩で通勤していると、何とも美しい石畳が足下に広がっている。

こちらの生活で周りを見渡すと、美しく敷き詰められた模様が多いことに気付く。マンションの中で目を向けると、床には正方形や長方形の板が、バスルームやキッチンにはタイルや大理石が、美しく、整然と敷き詰められている。窓からふと外に目をやると、マンションの壁面にはレンガが。マンション自体、長方形の大きな窓や壁で敷き詰められているように見ることができる。歩道には様々な色や形（長方形だったり、正方形だったり、中には正六角形のものも）が織りなす美しい敷き詰め。学校の中にも、多くの美しい敷き詰めが存在する。教室や廊下の床は様々な敷き詰められている。シンプルに敷き詰められているばかりでなく、長方形を用いて複雑になされている床もある。上空から眺めてみると、碁盤の目に整備されているこの街自身が、100m四方の正方形で敷き詰められたものに見え



るであろう。敷き詰めという観点で眺めてみると、ここには驚くほど存在している。幾何学模様の美しさを至るところで満喫できる。

敷き詰めを数学的に考察すると、1点に集まった角の大きさの和が360度でなければ、敷き詰めは成立しない。形や大きさが等しければ、どんな形の三角形でも四角形でも敷き詰めることができる。しかし、正多角形で考えてみると、できるものは限られる。正三角形、正四角形(正方形)、正六角形の三種類だけではないだろうか。一つの内角の大きさが108度である正五角形では360度にならないため不可能であるし、正七角形以上でも敷き詰めは成立しない。学校の調理室の前の廊下が、正六角形で敷き詰められているのは、一つの内角が120度である正六角形だからこそである。



学校で正六角形の美しい敷き詰めを眺めていて、蜂の巣の断面がまさにこの模様であることに気付いた。無駄なスペースをできるだけ減らそうと考え、断面を正六角形に敷き詰めることのすばらしさがわかる。驚くことに、蜂は幾何学を学ばずに蜂の巣を効率的に作り上げていくことを知っているのである。



子どもから、また自然から学ぶことは多い。

平成16年度派遣

「Big 便」 ロンドン補習授業校便りから

ロンドン補習授業校校長 長山 正宏



10月31日は、なぜか日本では定着しない万聖節(と言うとますます分からなくなります)の前夜祭です。もともとScotlandを発祥とし、欧米、中南米にも広まっている“Halloween”のことです。ちょっと異なるかもしれませんが日本のお盆にあたるケルト人の宗教的行事で、秋の収穫を祝い、亡くなった家族や友人を尊び偲ぶものが、今の形になったと言われています。アメリカでは約50%の人間がお祝いすると言われクリスマスに次ぐビッグイベントですが、ここイギリスではそれほどでもありませんでした。イギリスでは、むしろ11月5日の“Guy Fawkes Day”のほうが盛り上がり聞きます。今回、出張のためその夜にイギリスにいないのが残念です。これについては次の項で述べることにします。

今イギリスでは

GUY FAWKES DAY 1605年、11月5日、カトリック教徒による国会議事堂爆破事件の陰謀が発覚しました。その首謀者がGuy Fawkesをはじめとするカトリック教徒だったのです。今でも11月5日は「ガイ・フォークス・デー」と呼ばれ、巨大なボンファイアを焚き、花火を打ち上げる祭りが行われます。焚き火の真ん中には巨大な人形が立てられ火あぶりにされます。この祭りの目的には数説あり、悪政に抗議したGuy Fawkesの行動をたたえるためという説だったり、「政府に反逆するとはけしからん」ということで首謀者を見せしめのために火あぶりにするという説もあります。現在、子どもたちは自分で人形

を作り街行く人に「Penny for the Guy.” ガイのために小銭を。」と言って小遣いを稼ぎ花火を買うという年中行事になっています。ハロウィンが過ぎると、夜になるとあちこちで花火が上がっていますが何と言っても5日最高潮で、広場にはGUY FAWKES DAYの横断幕が掲げられています。多くの人々が集まって「大花火大会」が催されるのでしょうか。

今補習校では

今学期の授業日は残すところ7回になりました。日本的にいうとあと1週間で冬休みです。補習校勤務は楽でいいなあと思う諸氏に実態をお知らせいたします。そもそも補習授業校はどんな学校かという説明をしてからじゃないと私たち派遣教員の重労働をご理解いただけないでしょう。そこから話を始めましょう。

補習授業校には、月曜日から金曜日までを現地の学校—簡単に言うと朝から帰りまで英語だけの学校—に通っている子ども達が、その意思が本人からのものか保護者の一存かは別問題として、日本語を学びたいという目的で集まってきます。当然、ウィークデーは現地校に通っていますので補習授業校がOpenするのは土曜日だけです。年間で40回程度の授業日数しかありません。しかもロンドン補習授業校の場合は午前中120分のみ。この120分は学年に応じて、3こま・2こまに分けて授業を行っております。

今回は、児童子供の実態を紹介します。在籍する児童生徒は必ずしも純粋な日本人とは限りません。また、全員が単純に日本国籍を有するかというとそうでもありません。日本語が達者な子もいれば、挨拶程度の日本語しかできない子もいます。顔立ちもイギリス人のようだったり、染色しているわけではないのに茶髪・金髪の子もいます。先日、小学部2年生のクラスを授業参観しました。漢字の勉強をしていましたが、その中で「○長」という題材で学校には校長、会社には社長・・・のように「長」の音読み/意味理解の学習でしたが、担任が、学校や会社の説明をしていました。市長が出てきて「市」の説明をしていたのですが、子ども達はなかなか理解しません。ついに担任は約束を破って「City」のことよ」と言ったら全員が「なーんだ」と一瞬にして理解したのです。補習授業校とはそんな子ども達が集まっている学校です。ちなみに、授業中は英語を使わないというのが補習授業校の大原則です。

今わが家では

夏の間は西日を遮ってくれた大木が、今では骨粗しょう症のようにすっかり葉を落としました。その大木は隣家のものなのですが、落ち葉は遠慮なく我が家の庭に落ちてきます。今、太陽はその木よりずっと左側に沈むようになっています。先月から日の出、日の入りの時刻を記入しておりますが、先月も日の出は7:01。ほとんど変わってないように見えますが、先月は夏時間。つまり、1時間も日の出が遅くなり、日の入りも1時間以上早くなっており、1ヶ月の間に2時間も日が詰まっています。しかも、天候はすっきりしない日が多くなり、間違いなく日照時間は激減しております。家の中のヒーター周りには洗濯物が目に付くようになっています。

おまけ

来週8日から10日、ワシントンD.C.において補習授業校派遣教員研修会が開かれます。欧州には補習授業校が少ないせいもあり、アメリカへ出張です。各校が抱える問題発掘と解決、補習授業校の進むべき方向性の模索、学校経営上の具体的課題解決等、協議内容は多岐にわたり密度の濃い研修になりそうです。

バンコク日本人学校から

バンコク日本人学校教諭 中島 明美

みなさま、こんにちは。

私はこの4月から、タイの泰日協会学校（通称バンコク日本人学校）に派遣され、元気

ciati

に働いています。

バンコクは、タイの人からは「クルンテープ」と呼ばれています。1年はだいたい3つの季節（暑期・雨期・乾期）に別れていて、今はだいたい雨期から乾期に移る頃です。タイは「微笑みの国」と言われるように、穏やかな笑顔を見せてくれる人が多くいます。王様や王妃様がとても尊敬されており、仏教寺院が多くあります。タイの食べ物はとてもおいしく、物価はかなり安いです。バンコク都内のあちこちにある屋台では、100バーツ（約300円）もあればおいしく贅沢な食事ができます。

バンコク日本人学校は、11月7日現在、小学部中学部の児童生徒合わせて2114名、史上最高の人数となっています。そのため、近々新校舎設立が予定されています。私は、小学部1学年8組の担任です。小学部1学年のクラスは9クラス、人数は現在304名です。子どもたちの約9割が、日本の企業から派遣されているご家庭の子どもです。あとの1割は、父親か母親がタイ人という子どもです。クラスの雰囲気は、日本とほとんど変わりません。小学部の校舎は美しい中庭に面して、回廊のように建てられています。安全確保のためなかなか戸外で遊べない子どもたちは、学校で友だちと中庭や運動場で遊ぶことをとても楽しみにしています。

11月7日に本校の大運動会が行われました。小学部中学部合同の運動会は、児童生徒・職員・保護者を合わせて7000人以上が一堂に会し、たいへん盛り上がりました。照りつける太陽の下、練習を続けてきた成果を発揮することができて、ひと安心です。子どもたちも私共も、ずいぶん日に焼けました。

運動会も終わり、学校も来年度に向けての諸準備が始まっています。緊張の連続の日々ですが、日本全国から集まっている先生方と力を合わせて働いていきたいと思えます。

シンガポールに赴任して

シンガポール日本人学校中学部 教諭 友部 道夫

シンガポールに赴任して、あっという間に半年が過ぎようとしています。4月、初めてシンガポールに着いたときの印象は、「緑が多く、きれいな街。」ただ、日本を発つときには、ジャケットが必要なくらいでしたから、この蒸し暑さは正直驚きました。日差しの強さも、さすが赤道直下の国を思わせるものです。

さて、私はシンガポール日本人学校では、障害をもつ生徒が学ぶ「チャレンジ学級」というクラスを担当しています。今年度、小学部や他の日本人学校から5名の入学生を迎え、1, 2年生6名が、毎日元気に生活しています。生徒の実態は様々ですが、一人ひとりのペースにあわせて学習できるように学習内容を工夫しています。その他、生徒によっては、在籍学級の授業（美術や音楽等）に参加して、在籍学級の友達と共に学習している場合もあります。在外教育施設でこうした障害をもつ子どもたちのためのクラスをもつ学校は、あまり多くないと聞いています。そのような中で、海外で暮らす子どもたちのために、どのようなことができるのか、何をすべきなのかを日々考えさせられる毎日です。

チャレンジ学級では、日常生活に必要な事柄や季節や行事に合わせた生活に根ざした学習、将来の社会自立に向けた作業的な学習の他、音楽や体育、個々の実態に応じた言葉や数的な学習をしたりと、幅広い授業を子どもたちと共に作り上げています。単元を考える上で難しい点は、こちらには四季がありませんので、子どもたちにいかに日本の季節感を味わってもらえるか、また、日本の文化に触れてもらえるかということです。日本の四季にあわせて教材や壁面を製作したり、日本の季節行事にあわせて歌や創作活動を取り入れながら単元を考えたりしています。また、学校での学習だけでなく、実際に校外へ出かけての体験的な学習も取り入れています。バスやMR T（地下鉄）、郵便局やスーパー



マーケット等の公共施設の利用の仕方など、この国で生活するのに必要な学習も行っていきます。シンガポールは世界的に見ても比較的治安のよい国とされていますが、日本ではありませんので、やはり、事故等以外にも注意しなければならないことが多くあります。こうした、日本やシンガポールの生活に合わせた単元を考える中で、実は私自身が日本の文化を再認識したり、シンガポールの生活様式や文化を知るよい機会となっています。

赴任して半年、担当者全員が力を合わせて、何とか学級を運営してきました。難しい課題に直面することも多かったですが、一人ではここまで頑張ることができなかつたと、今改めて思います。それと同時に、チャレンジ学級担当者以外の他の職員の方々にも、いろいろな面でサポートしていただいたり、ご指導いただいたおかげでもあります。チームで仕事をするものの難しさや大切さを、改めて感じさせられています。

在外教育施設での教育は、日本で行うものより難しい面や、必ずしも恵まれた環境ばかりではありません。保護者もまた、海外で障害をもつ子どもの療育に対していろいろな不安を抱きながら生活している場合も多く、その願いは様々です。そうした状況を踏まえて、私たちにできる最良の教育をどのようにすれば行うことができるのか、今後の課題は少なくありません。しかし、この機会を無駄にすることなく、試行錯誤しながらも自分なりに精一杯頑張っていこうと思います。

最後に、この常夏の国での生活をよく知り、いろいろな人や文化に触れながら、改めて日本を振り返り、日本の良さや日本人の良さに気づけるよう、国際理解にも力を注ぎ、貴重な体験が多くできるように心がけていきたいと思っています。

チューリッヒ日本人学校に赴任して

チューリッヒ日本人学校教諭 小濱 靖彦

グリエッツイ。(おはよう、こんにちは、今晚は、スイスで一番よく使われる、挨拶言葉です。時間に関係なくいつでもこの言葉で笑顔が生まれ、会話が始まります。) チューリッヒ日本人学校は、スイス最大の都市チューリッヒ市内から車で15分、ウスター市にあります。学校のすぐ南側には、なだらかな丘陵が広がり、丘の頂上にはウスター城とウスター教会が並んで日本人学校を見守ってくれています。丘の斜面にはリスが棲む大きな大木が茂る森が広がります。学校から100m離れた丘の麓には水量豊かな小川が流れ、両側に木々が茂り、オシドリ、カモなどが泳いでいます。運動場の隣の牧草地の春は、一面タンポポが咲きほこります。牛が放牧されている隣で、子どもたちが体育の授業や遊んでいる姿はのどかな風景です。恵まれた環境に囲まれています。



本校は創立18年を迎え、設立当初に比べ児童・生徒数は減少してきましたが(現在児童生徒数31名)、家庭的な雰囲気の中でお互いに支え合って明るく素直で全ての活動に精一杯の頑張りをを見せてくれます。先日行われた学習発表会では、絶賛の評価をいただきました。地域の方々から温かい心のこもった拍手をいただき、日本とスイスの架け橋の役目を演じてくれています。「世界の友と さあ手をつなぎ 明日の世界にはばたこう」は校歌の一節です。チューリッヒ日本人学校の他の先生方と一丸となって、明日の世界にはばたく子どもたち、未来を託せる子どもたちの成長を願いながらこれからも精進していきたいと思っています。



サウジアラビア王国・リアド日本人学校に赴任して（雑感）

リアド日本人学校教諭 伊藤 純一

15時間。着いたのは観光目的では入国できないサウジアラビア王国の首都リヤド市。まず空港について驚かされたのは、マシンガンを持った警察官が空港内を歩いていたこと。そして、パスポートに書かれたアラビア語の文字。何もかもが新鮮に感じるこの国での生活が、ここから始まった。

翌日の昼食前、モスクのスピーカーから「アラーアクバル、アラーアクバル・・・」という初めて聞く大音響のアザーン（お経のようなもの）が流れた。サラ（礼拝）

が始まった。日本にいるときからイスラムの人々は1日5回のサラを行うことは知っていた。



（リヤド郊外のモスク）

しかし、実際に市内の多くのモスクからアザーンが流れるのを聞くと、迫力があつた。アザーンを合図に人々がモスクに集まってきた。イスラムの国にいることを実感する瞬間だった。

商品には、中国、タイ、パキスタン、エジプトなどのラベルが貼られていて、世界のいろいろな国々から輸入されているようであった。

学校は、児童・生徒が9人とかなり少ないが、学年によってはマンツーマンの授業もあり、子どもたちは一生懸命に学習に取り組んでいる。校外に出て学習することも計画されるのだが、テロがあるため今は自粛傾向にある。しかし、校内で行われる行事については安全を確認しながら行われている。



（土漠のらくだ）

5月中旬にはリヤド市内にある、キングサウド大学の日本語学科の学生との交流学習会があつた。この交流学習会の目的は、お互いの国の歴史や生活、文化を理解することがねらいである。本校の児童・生徒も日本の生活や文化について知らせることができた。最後に保護者に協力してもらい、お好み焼きやかき氷をみんなで食べた。今回の行事を通して、サウジアラビアについての理解をより深めることができた。

来年は日サ国交50周年を迎える。祝賀行事も計画されているようである。今後、中東が安定し、誰でもサウジアラビアを訪問できるようになることを望みたい。



（リアド日本人学校）

モスクワ日本人学校に赴任して

モスクワ日本人学校教諭 小沢 浩

モスクワ日本人学校に赴任して早7ヶ月。振り返ってみると、モスクワで学んだこと、考えさせられることが数々あります。特に、モスクワ日本人学校での先生方と生徒達との出会い、またロシア現地校との出会いは、私に新しい目を向けさせてくれました。

モスクワ日本人学校の先生方との出会いは、教育に対する積極的なアプローチの仕方と前向きな姿勢を私に教えてくれました。例えば、職場体験学習を考えたとき、ここロシアでは日本のように簡単に事業所に行くことができません。治安が悪いため、簡単に外を歩くことができないのです。そのマイナス面を見たとき、この企画は無理かもしれないと思

ってしまいがちです。しかし、少しでも教育的な価値があるのなら、追求してよりよいものを作っていこうという姿勢が先生方には見られます。そこで綿密な計画を立て、スクールバスで実施しています。会議においても時間を十分かけて一人ひとりが小さなことまでもこだわってよりよいものを作っていこうとします。その前向きな姿勢に私は驚かされました。そしてその努力の成果が生徒たちにつねに反映しています。生徒は先生たちの要望に答え、もてる力を一生懸命発揮しようとしています。学校生活はいつも活気に満ち溢れています。モスクワ日本人学校にきて、改めて教育に対する積極的なアプローチと前向きな姿勢が大切であることを感じました。

次に、ロシア現地校との出会いが、英語教育についての新しい目を私に向けさせてくれています。モスクワ日本人学校は、ロシア現地校と定期交流を行なっています。同じ中学生であるにも関わらず、彼らは流暢な英語を話すことができるのです。カリキュラムはその学校独自で作られ、テキストは生徒の能力を引き出せるものを英語教員が選別します。そこを卒業する生徒で英語が話せない生徒はいないそうです。どのような手法で、またどのようなカリキュラムで、そして教科書は何を使っているのか。まだ具体的な調査をしていないのでわかりませんが、英語教授法として成功している例が身近にあることを知り、とても興味が沸きました。今後調査をし、自分の英語教育に導入していきたいと強く思うようになりました。

以上、モスクワに赴任しなければ発見できず、考えもしなかったことです。このような機会を与えてくださったモスクワ日本人学校、茨城県教育委員会、そして文部科学省に感謝の気持ちでいっぱいです。

10周年事業に思う

大連日本人学校教諭 海老原 満

茨城県から大連日本人学校への赴任は私で3人目になります。平成6年度派遣の雨貝尚雄先生、平成9年度派遣の中藪正秀先生がそれぞれ3年間ずつ勤務されましたので、5年ぶりになります。雨貝先生は、日本人学校の立ち上げに、中藪先生は学校の基盤作りに尽力されたことを10周年事業に携わって強く感じています。

「温十年知新」今まで十年間、幼稚園・小学部・中学部みんなが力を合わせて学校をつくってきました。そして、新たな十年をみんなで仲良くつくっていききたいという気持ちを大連日本人学校の子どもたちが表した言葉です。節目の年に赴任した幸せを周年事業関係者ととともに喜んでいきます。

大連日本人学校は、今年十月十六日、補習校創立十五周年、日本人学校十周年記念事業を実施しました。来賓として、瀋陽総領事をはじめ中国内外から五十人の方々がお祝いにかけてくださいました。第1回卒業生の来校には本当に驚きました。午前中は、学校講堂で幼稚園から中学部までの学習発表会。午後は、会場を市内フラマホテルに移して記念式典・記念演奏会などを開催しました。(附属幼稚園があるのは中国ではここだけです。)

特に、参加者の感動を誘ったのは、オーケストラをバックに全校園児児童生徒170人が歌った校歌でした。清岡卓行氏(芥川賞作家)作詞、團伊玖磨氏作曲の校歌を声高らかに歌い上げていました。また、大連市長夏徳仁様の御祝辞には、大連日本人学校への期待がたくさん込められていて大変印象的でした。

地元の大連テレビも取材に来てくれました。大連テレビは今年の六月から中国で初めて日本語番組を始めたテレビ局です。「桜の風」という番組です。番組司会者の日本女性が午後の進行を務めて下さり、日本人学校特集として放送されました。大連外国語学院があり、特に日本語学習が盛んな地域を反映しています。

大連は、歴史的に日本と大変関係の深いところです。大連に生まれ育った人は大連への思いが強いのです。清岡氏の芥川賞作品「アカシヤの大連」がその例です。学校理事会、大連友の会、日本大連会などのように、補習校・日本人学校の立ち上げから今日まで尽力された方々には本当に頭が下がる思いです。これからの大連日本人学校の充実発展に微力でも貢献することが私の責務です。

アンニョンハセヨ

ソウル日本人学校教諭 岩崎 哲雄

—「え、もう着陸するの？」仁川国際空港へ向かう飛行機は成田を離陸して1時間半も経たないうちに着陸準備のアナウンスが流れていた。地図で日本の隣であることはわかっていたがこれほどまでも近いとは思わなかった。—

4月6日、ソウル日本人学校への赴任である。10時30分に成田を出発した私たちは、16時にはソウル市内のアパートに入居していたのである。あまりにもあっけなく海外引っ越しが終わり、私たち家族はアパートの中で10個の段ボールに囲まれ途方に暮れた。本当に海外に来たのだろうかかと頭の整理ができなかった。

ソウルに来たのだなと実感したのは、その日の夜だった。赴任のお世話をしてくれた先生家族と商店街に夕食を食べに行ったときである。アパートを出て商店街に一步足を踏み入れると、そこはまさに韓国だった。ハンゲルの書かれた派手な看板と大勢の人たちが目に入ってきた。お店では、韓国語が飛び交い、子どもたちは、屋台に群がり何やら辛そうな物を食べている。八百屋のお兄さんはとっても陽気で私たちに一所懸命話しかけてくる。それから、行き交う人々はみんな子ども好き。私の娘たちは頭をなでられ、ほっぺたを触られ、いつの間にか飴を口の中に入れていた。焼き肉屋の店員さんもとても親切。何度も何度も食べ方を教えてくれた。すっかり韓国の雰囲気圧倒されてしまったが「ここがソウルか。今日からここで生活が始まるのだ。」と実感がわきうれしくなった。

それから半年。私は日本人学校6年松組担任。日本の学校では経験できないようなことがたくさんあった。6月の修学旅行。初めてソウル市内から出る。引率であるが、韓国語がわからず役に立たない。通訳は子どもたち。どっちが引率かわからなかった。9月の運動会。幼稚部、小学部、中学部合同の運動会。組体操があったと思えば、お遊戯もあり、なんとも和やかな運動会だった。10月には歴史学習で、西大門刑務所歴史館を見学した。韓国と日本の歴史理解を広げることができた。

ソウルでの生活はまだ始まったばかりで、わからないことも多い。しかし、韓国理解に努め、赴任期間をしっかりと全うしたいと思う。



イスラマバード日本人学校に赴任して

イスラマバード日本人学校教諭 川崎 次男

3月17日にパキスタンの地に降り立ってから早7ヶ月が過ぎようとしています。ここイスラマバードでも、朝夕はめっきり涼しくなり、秋の気配を感じるようになりました。市内の木々も色づき始め、厳しかったイスラマバードの長い夏もようやく終わろうとしています。2学期が始まって2ヶ月。9月18日土曜日には学校の校庭で日本人会主催の盆踊り大会が開かれました。各団体からの出店やゲーム等もあり大変楽しい催し物でした。

10月には子ども達の最大の行事IJSデイが実施されました。近隣の学校の子供達を招待しての学校交流祭のようなものです。また、特別ゲストとしてカラチ日本人学校の子供達も来校しました。カラチ日本人学校はちょうど修学旅行でイスラマバードを訪れていて、その最終日に来校しました。前半の交流会は班毎に分かれ、すもう、竹とんぼ、折り紙、書道などを行いました。本校の子供達は英語で日本の文化を紹介しながら交流します。進行役及び案内役はすべて子供達です。後半は体育館でのステージ発表です。招待校6校の発表の後、本校の子供達の発表がありました。合奏と合唱「世界に一つだけの花」民舞「みかぐら」生け花披露、和太鼓演奏です。みんな1学期から一生懸命練習してきました。特に小学1年生から中学1年生という幅広い学年の子供達と一緒に演奏する

のですから、選曲や指導など大変難しい面があります。しかし、本校の子ども達は一人一人前向きに取り組み、当日はすばらしい発表ができました。

IJSデイが終了した2日後小学部5、6年、中1年生の修学旅行が実施される予定でしたが、危険情報などが流れたり諸事情を総合的に判断し10月初め最終的に中止となりました。普段生活している範囲では特に危険を感じるようなことはありません。パキスタンの人々もとても親切です。しかし、いろいろな情勢を考えると危機意識は常にもち生活していかなければならないのがパキスタンです。

来月11月28日には日本人学校と日本人会共同主催の運動会が行われます。しばらく過ぎるとその練習に入ります。何かと行事の多い2学期ですが、その度に子ども達の前向きな取り組みと一人一人の成長が見られることがうれしく思います。

* I. J. S = Islamabad Japanese School

赴任国事情、雑感

カラチ日本人学校教諭 鳥羽 誉司

カラチ（パキスタン）はイスラム教の国で、人口の97%がイスラム教徒です。1日5回のお祈りがあり、1回目は早朝（5時頃）から始まります。このお祈りのためのアナウンスが町中に響き、その声で目が覚めます。カラチの人口は増え続けており、政府も把握できていない状況だそうです。貧富の差が激しく、3千万円以上もする立派な家に住み、子どもをアメリカンスクールに通わせている家庭もあれば、食べるものがなく交差点で止まる車にむかって「恵んでくれ！」と手を出している家族がいます。市場に行けば、荷物持ちをしてお金を稼いでいる子どもがたくさんいます。私たちが買い物に行くとこのような子ども達に囲まれてしまいます。何とも言えない切ない気持ちになります。パキスタンは皮のボール製造で有名ですが、それは手先の器用な子ども達が作っていたそうです。（現在は、その状況を世界から非難されたため衰退気味だそうです。）当然このような子ども達は教育を受けていません。



パキスタン人は日本人に対してとても好意的です。町中にはバイク（ホンダ）や日本車（スズキ・トヨタ）があふれ、日本の力車から名前を取ったといわれるリキシャという乗り物が所狭しと走っています。何でも日本製は優れていると思っており、車にソニーのステッカーを貼っていたり、意味不明な漢字をペイントしたりしています。

道路にはロバ車からバイク、トラックまでいろいろ走っています。運転は雑で車線は無視です。4車線の道路に7台の車が止まります。ちょっとでもすき間があればどんどん割り込んできます。自家用車には車検のような制度はなく、窓やライトのない車はよく見かけます。日本で昭和に活躍した車が今も走っています。ほとんどの車は車間距離をとらずに走っており、ブレーキランプのつかない車が多い中で、乗っている方が恐くなります。

パキスタンの警察官は市民から信用されていません。警察官が小遣いを稼ごうと思えば、適当に車を止めて、「スピード違反だ」とかなんとか文句をつけて罰金を取ります。それが外国人の車ならパキスタン人の場合に比べ倍ぐらいの金額を請求してきます。しかし、たとえ無免許で運転していて捕まっても、お金を渡せば見のがしてもらえるそうです。

カラチへ赴任して半年ですが、日本で当たり前と思っていた生活を見直すよい機会をいただけたと思っています。

特に、

- ①子ども達は全員学校へ行けること

- ②蛇口をひねればいつでも飲める水が出ること
- ③電気が安定して絶えず送られてくること
- ④多くの働いている人は自分の仕事に責任を持っていること

「物をなくしたらすぐ買えばいい」という日本と違い、日本人学校の子ども達は物を大切に使います。最近の日本のニュースを見聞きすると、日本は物の豊かさに反比例して、心が貧しくなっていくような感じがします。

これだけから判断する、パキスタンとはとんでもないところのように感じられますが、人々は人情深く、困っている人がいればみんなで助けてくれます。人々は時間に遅れても何とも思わずマイペースで生活しています。(日本人は時間に追われているようなので、)働きたくなければ働きません。人々はみな元気で明るく幸せに見え、むしろうらやましくも感じます。

クアラルンプール日本人学校に赴任して

クアラルンプール日本人学校教諭 板谷 康

こちらに来て、半年が過ぎました。日本とは違った生活で、慣れるまで時間がかかりましたが、今ではだいぶ自立した生活ができるようになりました。四季のない常夏の気候や日本料理とは違うマレー料理などがあり、また、車の運転にも日本とは違った交通事情があり、神経を使う場面もあります。

マレーシアでは、マレー系、中国系、インド系など複数民族で構成されているため、言葉の面での難しさを感じます。英語でコミュニケーションをとれるようにがんばっています。

学校では、6年生を担当しており、1クラス30名くらいで3クラスの編成です。児童の出入りの激しさは、さすがに在外教育施設ならではと感じています。授業のカリキュラムは、日本に習って進めています。英会話の時間が、週2時間あり、児童のレベルによって学年全体を7クラスに分けて専門の先生によって行われています。また、高学年では、国語と算数以外の教科においては、専科制をとっており、中学校と同じように専門の先生によって授業が行われています。

海外ならではの教育として、国際交流会があります。これは、各学年ごとに現地の学校の児童と交流するもので、1学期には本校に招いて、日本の文化を紹介したり、一緒に活動したりしました。また、2学期には反対に、相手校に行き、マレーシアの文化に触れたり、一緒に活動したりしました。

さらに、11月より週1時間行われている体育の水泳の時間に英語の指導者が授業を進めるイメージングがスタートしました。水泳と英語を一緒に学ぶというねらいで、始めました。



夏休みには、カンポンホームステイ(カンポンというのは田舎という意味)がありました。希望する児童だけですが、農村部の家庭にお世話になりながら、マレーシアの生活を体験するというものです。私も、引率の教員として、ホームステイさせていただきました。ごはんを右手で食べたり、マレー式お風呂のマンディという水浴びをしたりと、ふだんはできない体験をさせていただきました。

まだ、1年目たっていませんが、たくさんのご経験をしたいと考えています。



心も気温も熱いスラバヤ

スラバヤ日本人学校教諭 岡田賢司

スラバヤは日本から南へ約6,000km赤道を越えたインドネシアのジャワ島にあります。首都ジャカルタに次いでインドネシア第2の都市になり人口が約360万人、東部ジャワ州の州都になります。市内のいたるところでワルン（屋台）が軒を並べ、自転車で野菜や、飲み物、パン等を売り歩くといった一昔前の風物が見られます。これと対照的に、市の中心部から南にかけては、近代的なビルやホテル、ショッピングセンターが立ち並び、「英雄の塔」の北側にあたる旧市街地では、主に華僑が各業種の専門店を営み、商業流通の中心になっています。また、港付近には、オランダ統治時代の建物が数多く残されています。さらに郊外には、工業団地や新しい工場が増えつつあり、市の西方の湿地帯には塩田やエビの養殖場が作られています。スラバヤは、初めて訪れる人にとっては、現在と過去が入り交じった不思議な雰囲気を持った街です。治安は、インドネシアの中でも安定していると言われています。スラバヤ近郊には、製造業を中心に100社を超える日系企業が進出しています。在留邦人は600人強で、スラバヤ日本人学校は59名の児童生徒が学んでいます。



少人数のためスクールバスはなく、児童生徒は、各家庭の自家用車で登下校しています。小学部低学年の児童と中学部の生徒が汗を流しながら遊んでいる姿も日常の風景です。昼食は、教職員・児童生徒ともに弁当を持参します。また、水道水を飲むことができないので、水筒を持参しています。各教室で先生と児童生徒がいっしょに昼食をとっています。現地校との交流教育も盛んで、12月5日には現地の小中4校を招いて「国際文化交流会」を開催します。日本とインドネシアの互いの文化を紹介する本校でも特に力を入れている行事の一つになります。人数は少ないながらも、その良さを生かして温かい人間関係が作られているのがスラバヤ日本学校です。



フランクフルトにて

フランクフルト日本人国際学校教諭 山脇 信至

4月に渡独して、はや半年が過ぎました。ドイツでの生活にもすっかり慣れて、と言いたところですが、最大の難関「ドイツ語の習得」が残っています。大学生の時にしっかりやっておけば・・・とありがちな後悔をしました。フランクフルトは国際都市ですから大概のことは英語で通じますが、やはり郷に入っては郷に従えという言葉どおり、少しでもドイツ語を話そうと努力をすると、対応がまったく違ってきます。職人気質で気難しいドイツ人というイメージがありますが、あに凶らん、とてもフレンドリーな人々です。

現在、週に2日ドイツ語学校に通っています。久しぶりに学生に戻り、「解らん！」という非常に懐かしい感覚も甦ってきました。同じクラスにカナディアン、トルキッシュ、チャイニーズ、コスタ・リカなど、実に様々な国の人がいます。そこで改めて、文法はわ

かるくせに話せない、という自分に気づいてしまいました。間違ってもいいからどんどん

口に出してみようという勇気がない！英語科の教員として解決策を見出さなくてはならないくせに、ドイツ語を学ぶ中で自分がそこにはまってしまおうとは・・・ともあれ、何とかドイツ人と普通に話が出来ようになりたい、という一心でがんばっているんです。これまでに一番戸惑ったのは、数字の言い方でした。なぜか下二桁がひっくり返るのです。

たとえば63は「ドライ ウント ゼヒツィヒ」と読みます。日本語にすると「3と60」になります。

どうやらドイツの計算方法に起因するようなのですが、いまだに理解に苦しみます。余談ですが「ゼヒツィヒ」は普通に聞くと「ぜひぜひ」に聞こえるので、「なんやドイツ人が日本語しゃべりよる！」と喜んでいた派遣教員もいらっしやいました。

何にも増して印象深いのは、子どもの言語習得能力の高さです。私の娘が同じ日本人学校の2年生に在籍しているのですが、週2時間の授業でみるみるうちにドイツ語を身につけています。文法などという理屈抜きに、ひたすら言葉を吸収してしまう力には脱帽してしまいます。昨年度から茨城でも強化された小学校での英語教育も、よりいっそう推進していくべきだと感じました。

こちらで過ごす3年間で、ドイツ語を始め、いろいろなことを吸収して日本に、茨城に帰りたいと思います。その時にはまたよろしくお願ひします。



追加

ホーチミン日本人学校に赴任して

ホーチミン日本人学校 八木 知則

ベトナムに赴任して1年半が過ぎました。赴任当初は時間の流れるのが遅く感じたものですが、今思うとあっと言う間というのが実感です。恥ずかしながら、最近ようやくこの国の良さが分かり始めました。今回のこの原稿を書くにあたり、ここベトナムの魅力を「食」を中心にお話ししたいと思っています。みなさんが、もしベトナムに旅行される際の参考にして頂ければ幸いです。

日本では食事に行く時に「ごはん（ご飯＝お米）を食べに行く。」とありますが、ここベトナムでも同様に「ディーアンコム（ご飯を食べに行く）」と言います。つまり日本と同じお米の文化が根付いているのが、ここベトナムです。また、いわゆる「皿飯」と呼ばれる、おかずのせご飯は定食屋の定番です。基本的に味付けは濃い目ですが、おかずのレパートリーは多く、私は「豚の角煮 卵添え」がお気に入りです。

また麺の種類も大変多いです。一番メジャーな麺は「フォー」ですが、その他にも地域によって特色のある麺がたくさんあります。ベトナムの麺の大きな特徴は、米の粉から作られた物が圧倒的に多いことです。米から作った麺は優しくまろやかな風味で、さっぱりとしています。また個人的な好みですが、麺の上に様々な薬味やトッピングをのせて、楽しませてくれるのも大きな魅力です。

この他にも多くのベトナム料理があり、一度には紹介できません。ただどの料理にも共通していることは、日本人の口にとても合うということです。（香草など多少きつい時もありますが）機会がありましたら、是非いろいろなベトナム料理にチャレンジしてみてください。

最後に仕事の話をして少し。現在勤務する学校での同僚の先生方のことです。素晴らしい先生達に巡りあったことが、一番大きな喜びであり、自分の財産になったと思います。全国各地から個性あふれる先生方が集まるので、様々な考え方や、各県の特色を感じます。いろいろな意味で刺激にあふれ、自己の価値観を広められるよい機会と感じる今日この頃です。

来年度は3年目となります。学校の中心になれるよう頑張りたいと思います。

磨きがかかる

アブダビ日本人学校長 村田俊美
 どんなことがあってもめったに驚かない歳になってしまったので、このごろは発見や創造という言葉が出てこない。わくわくするような感動もここしばらくない。人間は50歳を過ぎるころから今までの元気な細胞が変わって老人細胞というものが出来始めて、ゆっくりと大地に帰る支度に取りかかるのだそうだ。驚かないことは、逆境にあっても平気でいられるし、学校経営がどんなに困難であってもほぼ解決あたりまでの見通しは立つので気は楽だ。しかしなんだかさびしい。

アブダビ日本人学校に赴任して、校長も小学校の理科の授業を担当することになった。植物の栽培が非常に難しいと聞いた。花壇の土は、しみ込むように水を吸い取る砂漠の砂である。それに熱い。夏は48℃の毎日が続く。雨は赴任して以来一度も降っていない。

元来山野が好きなので植物の知識と経験は先生方より上だという自信はあった。失敗をしないように周到に準備をし、種を乾燥させ冷蔵庫で冬季の環境を経験させ発芽促進のために水に浸しておき、さらに「わら一本の革命」という本で知識を得た「粘土団子」という腐葉土でその種を包み、花壇は地温の上昇を遮蔽するために発泡スチロールで全体を覆い、そして種をまいた。見事なオクラが育ち理科の観察学習はうまくいった。実もなって児童も家庭で食べたし、もうすぐ日本の私の畑のように立派な姿になるとほくそ笑んでいた。

ところがである。7月頃になると、枝葉は青々として元気なのに背丈の生長がストップした。そのうちに下葉が落ちた。枯れ始めた。そして葉が一枚もないのに茎は青々として明日にも芽が出そうな勢いである。同時に、隣のハウセンカは花ばかり咲いて上に伸びない。ヘチマは一個の実も結ばない。理科主任も花の咲かない延々と蔓だらけの朝顔をばやき始めた。気がついたら、こんなつまらないことに夢中になっていた。前年派遣の先生が、やっぱり難しいですねと言う。

もう意地である。植物関係の本を漁りだした。ある日の資料に衝撃を受けた。それには、植物は40℃になると植物自身が生長を止めることと植物細胞にあるタンパク質は50℃になると凝固することが書かれていた。まさにこれである。夜間でも42℃の日があったし、ひなたは50℃はどうに超していたはずだ。

この日から、花壇を見る目が違った。そして、自然の摂理に恐れ入った。植物が過酷さから自身を守るための手段が未成長だったとは。そこには、生きることの価値や成し遂げることとは全く反対の価値基準があった。見ると、赴任時に正門脇にあった10cmほどのテーブルツリーの木は今も同じ大きさだ。そういえば、人間は自然には勝てないということも誰かが言っていた。

感動はもちろんのこと、今の学校がどんな非常事態に陥っても絶対に驚かないという年寄りの発想にいつそうの磨きがかかってきた。

パ リ 日

パリ日本人学校 古橋 雅文

「パリ日本人学校」といってもパリ市内にはない。市内から20kmほど郊外に位置するモンティニー市というところにある。児童生徒のほとんどはパリ市内に在住し、毎日30分～1時間ほどかけてバス通学している。全校児童生徒で約260名おり、自身は中学1年、28名を担当し、中学部の理科は勿論、小学部の理科、中1、2の技術家庭科を担当している。

国内の学校との違いは？ と聞かれれば数多くある。国内とは違い数多くの行事があり、その計画・実施は正直、大変である。また、生徒との打ち合わせは、バス通学の関係で放課後が活用できないので、すべて授業中と休み時間に行わなければならないことも、最初は慣れずに戸惑いを感じた。5月の体験学習（4泊5日でヨット実習などを行う）に始まり、運動会、社会見学（文化施設の見学）、秋の遠足、パリ日まつり（文化祭）、学習発表会（演劇などを行う）、現地校交流、スキー宿泊学習など毎月のように何らかの行事がある。その間に、定期テスト、実力テスト、保護者面談、授業参観などが入り、あっという間に毎日が過ぎていく感じである。それでも、すべてを手際よく計画し、実施していく生徒を見てみると、驚きを感じると同時に頼もしさを感じる。また、自分も初めて行う

事が多く、勉強にもなり、新鮮である。同僚の先生方も力がある方ばかりで、「業師」ともいえる色々なやり方を目の当たりにすると、自分の力のなさを痛感するばかりである。しかし、多くの「業師」と共に仕事ができるということは、素晴らしい財産となり、今後の教育に十分に活かしたいと考えている。

異国で生活するのは、観光と違い様々な苦勞と戸惑いがある。言葉が通じないことは何よりも生活を不便にさせている。ちょっとした買い物にも苦勞が伴う。治安の面でも気をつけなければならないことが沢山ある。また、慣れないフランス社会の中で生活する家族のことも考えなければならない。それぞれが思っている以上に精神的に疲れが出ることに、生活をして初めてわかった。それでも、日本では経験できないことを数多く経験できることは、自分にも、家族にも、無形の財産を作り上げているのだと思う。月並みではあるが、せつかく、異国の地で仕事をするチャンスを与えて頂いたのだから、それを十分に活かし帰国後は、それを少しでも教育現場に還元できるよう自己を磨いていきたい。

今日のベトナムの教育事情

ホーチミン日本人学校 人見 実俊

ホーチミン日本人学校に赴任してきて1年半が過ぎた。この機会に赴任国ベトナムの教育事情について簡単に報告する。

ベトナムにおける教育制度は5・4・3・4制を基本とする。小学校は5年生で義務教育である。かつては原則無償であったが、ドイモイ政策開始以降、設備費（2万ドン/月）や教科書代（5万ドン/年）等有料となった。（1万ドンがおおよそ70円） 2000年の就学率は95%で、2010年には99%の就学率を目指している。進級に関しては試験があり、試験に合格しなければ上の学年に進級できない仕組みになっている。しかし、実際のところ落第はほとんどない。2001年より土日休みの週5日制が実施され、週25時間授業である。学校施設や教師の数の関係で、午前の部・午後の部の2部制をとっている学校も少なくない。その場合午前の部は午前7時ごろより、午後の部は午後1時30分ごろより始まる。教科は、国語（ベトナム語）・算数・社会・自然・音楽・図工・体育・道徳・（英語・・・学校ごとに決める）・技術・労働・健康等である。

中学校は4年生である。2000年の就学率は74%で、2010年には90パーセントの就学率を目指している。都市部や経済的に進んだ地域では2005年までに、全国的には2010年までに義務教育化する予定である。中学校は週6日制で、週30時間の授業が行われる。中学校でも2部制が行われており、ホーチミン市の中学生の場合、放課後家に帰ってから学習塾に行ったり、英会話やピアノを習ったりと日本の中学生と同じような生活をしている。ホーチミン市でも学習熱はすごい。

ベトナムの小学校を訪問する機会が何度かあったが、訪問するたびに、なぜか懐かしい思いがした。

あ と が き

8月27日に行われた、第15回関東ブロック全国海外子女・国際理解教育研究大会は「日本の文化や歴史を愛し、世界と手をつなぎ、共に生きる日本人を育む」という大会テーマのもと、300名を超す参加者とともに、盛会のうちに終了しました。このテーマの「手をつなぐ」とは「同じ地球にすむ私たちがお互いを運命共同体として認め、手を取り合って生きること」と考えました。このことは、世界の諸民族や諸国民との間に世界的な相互依存関係が増大していることを認識し、共生への

が開催されます。前回の開催は、平成8年、第7回大会でした。大会テーマ『国際的に信頼され、国際社会に主体的に生きる日本人の育成』の下、関東都県、さらには全国からたくさんの方をお招きして開催したのです。平成8年というと、1月に橋本内閣が発足し、その12月には、ペルー日本大使公邸人質事件が勃発した年です。しかし、それから7年が過ぎ、世界の情勢は大きく変わりました。

今日、世界のグローバル化はますます進んでいます。しかし、一方で国家間、民族間の紛争は世界各地で依然として頻発しています。そのような中で、先日の、イラクでの日本人外交官殺害事件は、私たちに大きな衝撃を与えました。海外における国際貢献には様々な形があります。今、日本がどのような形で貢献することができるのかということについては、もう一度考える時期に来ているのでしょうか。そして、茨海研の私たちにできることは、自分たちの住む郷土の文化や伝統を愛し、国際的な視野に立った、自立した人間として、様々な問題を自らの智恵で解決できる日本人を育てることなのではないでしょうか。来年の茨城大会が発信するメッセージが、全国へそして世界へと広がることを期待します。

さて、最後になりましたが、今回の広報誌発行にあたり、お忙しい中、快く原稿依頼にお応え下さった方々、ありがとうございました。この場を借りてお礼申し上げます。

なお、広報誌に関するご意見は、下記のメールアドレスまでお寄せ下さい。

(y-morisaku@rose.zero.ad.jp) (文責 森作)